

2010年1～2月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
辻棲の合はぬめでたさ夢始め
埋火を育て記憶をたぐり寄す
踏まれても踏まれても下萌ゆるもの
日の匂ひ風のきらめき梅見頃
まろやかな日差しに尖る冬木の芽

横浜 下島 緑
産土は熊野の末社初詣
すこし反り壁になじまず初暦
華やぎと緊張にみて初句会
南へ飛機寒灯をひき離し
大寒も寒もなき国旅衣

藤沢 藤田 富子
つくばいの水涸れてある冬の朝
紺のれんくぐる老舗の冬座敷
朽ち果てし古刹深閑冬ざるる
さざ波の立ちて湖面の夕時雨
天を衝く杉の息づき冬に入る

さいたま 宮崎 美智子
史に残る囚人道路冷まじや
新雪に足跡のなく弥生子の居
空っ風鳥も翼をあふらるる
年忘れ景品小さき米俵
雪しまく車窓にまなこ細めけり

町田 小森 まさ彦
冬至日や摩天楼影街を切り
暗き地に光一筋冬の川
地吹雪に通り道あり屋敷林
息つきの出来ぬ一時吹雪中
侘助の落花が咲きを知らせくれ

2010年3～4月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
春めきて風の先へとひかるもの
何にでもちょっと触ってみる子猫
路地の春江戸の匂の三丁目
芽柳の揺れに重さの見えそめし
散り敷ける量感もまた八重桜

横浜 下島 緑
雪原をいま鳥となる大ジャンプ
己が影追ひ雪原を滑りゆく
東の窓に置きたるパンジー黄
天地を一枚として春霞
何の香となくただよひて庭籠

藤沢 藤田 富子
早春の築山に鷺みじろがず
青銅の屋根に白鳩日向ぼこ
裏道のうす墨いろに残る雪
年の豆齢の数ほど食べられず
やりかけの仕事そのまま春立ちぬ

さいたま 宮崎 美智子
狐面取らば酔顔午祭
物語遠野を読みつ春立ちぬ
雪下ろし五回目なりと越の人
早春の日差し玻璃戸を煌めかす
白鳥の川面に睡る日和かな

町田 小森 まさ彦
春昼や赤子目覚めている車内
ビロードの綿毛に風の光たる
直線のリラ道の果て蝦夷の海
吹く風のいまだ鋭く下萌の蝦夷
利尻富士春の波間に光たる

2010年5～6月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
とんと突く水の切れ端とてん
降りしきる丘へ沖より大南風
はやる鶉と息を通はせ鶉縄繰る
初夏の人の流れにまぎれをり
南風へひらくブティックカフェテラス

横浜 下島 緑
野仏に径は岐れて花辛夷
辛夷咲く日裏日面分つなく
チューリップ咲いてニコライ堂の春
かたまりてやがて散り散り花吹雪
天辺に今朝ぞ櫻の芽吹きなる

藤沢 藤田 富子
早春の築山に鷺みじろがず
青銅の屋根に白鳩日向ぼこ
裏道のうす墨いろに残る雪
年の豆歳の数ほど食べられず
やりかけの仕事そのまま春立ちぬ

さいたま 宮崎 美智子
狐火の昔話を花見の夜
武具飾るややに被せし兜かな
満開のこぶし行く手の空覆ふ
鰐口を強くたたきし余花の寺
花冷にカイロを買ひて巡りけり

町田 小森 まさ彦
振花の色が在処を教へくれ
鱧釣りや白砂に竿の五六本
桂浜の水平線に卵浪立つ
稲藁の炎の中に初鯉
初鯉土佐の暖簾とはちきんと

2010年7～8月掲載分

習志野 大慈弥 爽子
白靴を汚してしまふ好奇心
湧き水にトマトの真芯まで冷ゆる
初秋の浜辺に残る日のぬくみ
落葉松にふるるばかりに星月夜
こもれ日の揺れ秋声のこぼれくる

横浜 下島 緑
葉がくれに一と日の白さ沙羅の花
朝咲き夕べこぼるる沙羅の花
海開き風にふくらむ禰宜の袖
折る指もなかばよ旅に髪洗う
夜濯や旅に使ひしもの白し

藤沢 藤田 富子
夏霧のなかうっすらと浮かぶ富士
くちなしの香を漂はず宵の雨
桐の花朝靄晴れて村静か
苔むせる礎つづきをり暮菫の花
曲りくる電車傾ぎて雲の峰

さいたま 宮崎 美智子
神の池もり上ぐるやうに未草
竹林を風渡りゆき皮を脱ぐ
柄行の粋なうちわをうらびをり
能装束手法の極み夏館
藤の精花房の間に見る思ひ

町田 小森 まさ彦
透き通る沢の清水のアイヌ名
夏草や開拓村のありしとこ
オホーツクの風いっぱいのお花島
破裂する地点指す指原爆忌
人の世や終戦記念日忘れまじ

2010年9～10月掲載分

習志野 大慈彌 爽子
山荘の闇をいとどに残しやる
露むすぶ星に光をもらひつつ
遺されし絹縫ふ秋の灯をよせて
落鮎の命に尖りくる流れ
七輪の火を踊らせてゐる秋刀魚

横浜 下島 緑
哄笑の漏れくる露地の麻暖簾
ぬか漬の茗荷に食のやや進む
教会は青鳶の中母校古り
ワンコインほどの満月天心に
立ちあがる波透きとほり秋隣

藤沢 藤田 富子
海開き湘南新道渋滞に
汗かいて泣く子に母の怒鳴り声
食欲の落ちてやっとの冷索麵
猛暑に耐えもうしばらくの辛抱と
憂きことも思い出にかへ走馬灯

さいたま 宮崎 美智子
高原のいときららか星月夜
伝統の昔を偲ぶ虫送り
蓮の沼台(うてな)ばかりとなりけり
露天湯に祭の話しもり上ぐる
虫かごと置き忘れたる三輪車

町田 小森 まさ彦
新涼や寝過ごすことも嬉しくて
窓灯り見に回わる道秋の声
呼ばれたと振り返り見れば秋の声
柿の木の色変りゐて秋に入る
秋天に酷暑遠ざけるている碧

2010年11～12月掲載分

習志野 大慈彌 爽子
まだ硬さなき立冬の波の音
わたむしの透ける命の青さかな
冬晴の青さがビルを尖らせる
日の翳るはやさについて来る寒さ
行年の光陰かさねゆく宮居

横浜 下島 緑
小鳥来て雨の晴れ間を鳴きとほす
括られていて残菊の咲きつづく
紫苑咲く庭うつくしく掃かれをり
枯れるもの枯れつくし山明かるかり
杉玉のあをあを吊し新走

藤沢 藤田 富子
友逝きてむなく無情月の夜
墓石の垣乗り越えて小菊咲く
由緒読むかたはらにはや薄紅葉
葛の花蔓のゆくえのかぎりなく
百歳の恩師すこやか菊日和

さいたま 宮崎 美智子
秋まつり絵巻のやうな蔵の町
瞠目のその筆跡や蛇笏の忌
花托ふりからからからと蓮の実
白布取る句碑錦秋の境内に
秋祭竜を祀るも慣ひなる

町田 小森 まさ彦
朴落葉逢魔が時の音であり
銀杏散るニパイアールを敷き詰めて
風の道読みきっている懸大根
開墾の土もろともに引く大根
分校の碑文の先の一位の実